民医連厚生事業協

共済だより

2021年
8月
第160号

発行所●全日本民医連厚生事業協同組合
〒113-0034 東京都文京区湯島2-4-4
平和と労働センター6F
TEL03-5842-5650　FAX03-5842-5652
E-メール:k-tayori@min-iren.gr.jp
（共済だより用）
kyousai@min-iren.gr.jp
（厚生事業協宛）
ホームページ:https://min-jigyo.or.jp

いわさきちひろ「青いつば広帽子を持つ少女」1969年
（14ページに作品のコメントと美術館のご案内をしております）

主な記事

- **2021年度通常総代会開催** ～コロナ禍の中でも、連帯と協同の力をさらに強めよう！～
- **看護師で絵本作家の頭の中** 第1章／東京勤医会・友弥.（TOMOMI）
- **伝えていきたい私の民医連⑬③** 群馬・瀧口　道生（下）
- シリーズ **若者とともに主権者になろう⑦**／東京都立大学・宮下与兵衛
- **いま、なぜ憲法改悪なのか** パートⅡ⑨① 若手弁護士の会
- **縮図からみる世界④⓪** どこまでも〝虫の眼〟で社会を見つめ／斎藤　貴男
- **私の趣味・こだわり紹介⑥** ボードゲーム／兵庫・三木　康洋

2021年度
スポーツ文化企画
のお知らせ
https://www.min-jigyo.or.jp

ログイン　2021
パスワード　1192
（半角数字）

携帯電話でご応募の方はこちらからどうぞ
応募先のメールアドレスが読みとれます

新シリーズ（7回シリーズでご寄稿いただきます）

若者とともに主権者になろう

東京都立大学　宮下与兵衛

最終回　民医連で育つ主権者意識

今までの連載で紹介してきましたように日本の学校では残念ながら欧米の学校のような主権者を育てる民主主義的な教育が少なく、またあっても知識のみの学習です。

私は長野県にある民医連の法人で、憲法学習会の講師を務めました。その際、事前に青年職員のみなさんに「いま何に一番関心があるか」というアンケートをとっていただきました。その結果を見て、「民医連の青年の意識は非常に高い」と感じました。一般の若者に比べて、政治・社会意識が高いのです。私は、青年職員のみなさんが民医連に入った時から意識が高かったのだとは思いません。職場のなかで意識が変わったのです。つまり、職場での学習や活動が反映されているということだと思うのです。

なぜ、民医連の職場では主権者意識が育っていくのでしょう。

今の30代以下の若者たちは子どもの時から新自由主義の社会で生きてきています。「ゆとり世代」などと言われますが、問題は「ゆとり」教育ではなく、「新自由主義」です。若者に全く責任はないのに、新自由主義は心にも入り込んでいます。もちろん、私たち大人にもすべての人の心に多かれ少なかれ入り込んでいるのです。

新自由主義の考え方である「競争と自己責任」「自助努力」と言われ続けてきて、「自分のことは自分でしか守れない」「『一人はみんなのために、みんなは一人のために』なんていう助け合いは理想の話で現実は違う」という孤立感・不安感を抱いている若者が多いのです。さらに、「勉強ができなくて正規就職できず、その結果貧しい人は努力しなかった自己責任だ」、そして「自己責任なのに生活保護なんておかしい」とか、「役に立たない障がい者はいない方がいい」という優生思想まで持っている人が増えています（「努力しなかったから成功しなかったのだ」という能力主義の誤りについては、人間の能力の発達は家庭の経済力や文化力で大きく左右されているということが、話題のマイケル・サンデル著『実力も運のうち　能力主義は正義か?』や、教育学者の耳塚寛明他著『学力格差への処方箋―［分析］全国学力・学習状況調査』などによって明らかにされています）。

こうした若者を受け入れながら民医連では、知識の学習とともに国会行動や原水爆禁止大会参加や地域での社会活動などさまざまな体験によって主権者を育てています。新自由主義によって「社会」体験のできない若者が多いのですが、民医連の職場の学習と活動が若者を育てる「社会」になっています。民医連では、その学習と体験を通じて主権者に育っているのです。

今回の8月号で宮下先生のこのシリーズは終了し、テーマを変えて、続編で宮下先生が継続します。

宮下与兵衛（みやした・よへえ）
東京都立大学・特任教授（教育学）。元長野県立高校教諭。生徒の学校づくり参加、地域づくり参加による主権者教育を実践、研究してきた。現在は日本と海外の若者と主権者教育の比較研究をしている。著書『学校を変える生徒たち』『地域を変える高校生たち』『高校生の参加と共同による主権者教育』（いずれも、かもがわ出版）。各県の民医連の研修会で職場での主権者教育についてオンライン講演をしている。

CHECK!
宮下先生のシリーズにとても関心があります。
（北海道・勤医協苫小牧病院・町田　桂）

シリーズ

いま、なぜ憲法改悪なのか パートⅡ

⑨① 「一票じゃなにも変わらない」？
～自分のために、社会のために、投票に行きましょう～

「明日の自由を守る若手弁護士の会」共同代表　黒澤いつき
公式ブログ　https://www.asuno-jiyuu.com/

1．投票に行きましょう

秋に、衆議院の解散総選挙があるのをご存知ですか。7月4日の東京都議会議員選挙の投票率は42％でとても低く、市民の政治への無関心・無気力を感じざるを得ません。有権者が投票に行かないことが、どれだけ自分の暮らしや人生、あるいは社会にとって大きな打撃か、ぜひ立ち止まって考えてみてほしいと思います。

2．一票と政治のつながり

私たち一人ひとりの一票と現実の政治は、とても太い線でつながっています。差別発言が止まらないあの議員も、お金の不祥事が報道されたあの大臣も、小さな一票一票が積み重なったから当選し、議席を得ています。「地元のイベントによく顔を出してくれる」「この地区からは親の代から○○さん」「子どもが同じサッカー教室」等々、〝ご縁〟を理由に投票する人がとても多く見受けられます。情は大事ですが、それを一票に結びつけることは、やはり間違っています。そうした〝ご縁〟ではなくて、その政治家がどんな政治を目指すのか、どの法案に賛成・反対してきたのか、人権意識の高さ、などで選ぶべきでしょう。

例えば、「限りある税金（予算）を失業・貧困への対策ではなく五輪にまわす」政治を推進したのか、反対したのか、政党や公約を見れば違いは分かります。あるいは女性が男性と同等に自由に自分らしく生きられる社会に変えたい、と本気で考えているのか、選択的夫婦別姓や女性の貧困問題、性暴力被害者への支援などへの姿勢を見れば、政党・候補者ごとに確実に差があります。ぜひ見比べてみてください。

3．「一票じゃなにも変わらない」？

棄権する人はよく「一票じゃ何も変わらない」と言いますが、それは間違いです。

「一票じゃ何も変わらない」と言って何もしないから何も変わらないだけです。一票が積み重なることで、大きな勝利を導く。それはどの候補者にとっても同じことですし、地方自治体の選挙になれば数票の差で当落が決まることはしばしばあります。

4．「考えが100％一致する候補者がいない」？

また、「考えが100％一致する候補者がいないから投票しない」という人もいますが、その選択も間違いです。考えが100％一致する候補者は（考えが100％一致する友人がめったにいないのと同じで）、めったにいないのが現実です。むしろ選挙は「この中で一番マシなのは誰だろう？」と選ぶものです。「よりマシ」な候補者を選ぶ票が積み重なれば、一番マシな候補者が当選し、政治は〝よりマシ〟なものへと変わります。

5．地方政治と国政とのつながり

また、地方政治は、国の政治とは無関係、と思われがちですが、生活の現場からの声を受け止めて進む地方自治体の政治は、国の政治と直結しています。政府や政党が、地方議会からの突き上げで方針転換することは、まままあることです。ぜひ国の政治を変える熱量で、地方選挙も投票してください。

憲法学では「投票は義務か権利か？」という議論があります。日本のように権利だととらえる国もあれば、オーストラリアのように投票を義務化して、棄権に罰則を設ける国もあります。いずれにせよ、民主主義の歯車を正常に動かすためには、棄権という選択肢はありえません。また、在日外国人や子どもなど、政治の影響を受けつつも投票できない人もいます。自分に参政権があることの意味を何度でもかみしめて、票を投じましょう。

シリーズ

縮図からみる世界【40】

斎藤　貴男

どこまでも〝虫の眼〟で社会を見つめ

立花隆さんが4月30日に亡くなった。80歳だった。言わずと知れた「田中角栄研究―その金脈と人脈」（『文藝春秋』１９７４年11月号）でその名を轟かせ、以来、『中核VS革マル』『日本共産党の研究』『農協』『宇宙からの帰還』『脳死』『臨死体験』『天皇と東大』など、きわめて多様な分野に取り組んでは、大きな成果を収めてきたジャーナリストだ。

同業の私にとっては偉大な大先輩である。特に面識はなかったが、氏や柳田邦夫、上之郷利昭各氏らが牽引していた70年代後半の雑誌ジャーナリズムに魅了されたのが、この道を志した直接のキッカケでもあったから。

もっとも立花氏は、そんな卑小（ひしょう）な理解をはるかに超えた存在であったらしい。『サンデー毎日』（7月11日号）に載った昭和史研究家の保阪正康氏の追悼記事によれば、彼は１９４７（昭和22）年4月に学制改革の第1期生として小学校に入学した〝１００％戦後民主主義世代〟。そのことを強く自覚しつつ、〈この時代の人類史上の問題を抽出〉することと、哲学者や思想家たちの議論を整理した上で人間本来の存在について〈新しい視点を浮かび上がらせて、人類史の方向性を正確に示す〉ことを目指していた〈世界的なスケールを持ったジャーナリスト〉であった。

ここまで来ると、もはや文明史家の域ではないか。人間の煩悩（ぼんのう）を汲み取るようなところから始まるジャーナリズムが、そこまでの高みに達したのだとすれば、それは凄いことだと驚嘆せざるを得ない。

翻（ひるがえ）って自分自身を省（かえ）みた。私には立花氏の真似はできないし、そもそもそういう志向もない。時代はずいぶん移ろって、今やジャーナリズムの世界自体が風前の灯になっている。つまり取材のためのお金も人手も回ってこない。

だから、というわけではなく、私は私なりに積み重ねてきた仕事の当然の帰結として、どこまでも、〝虫の眼〟で社会を見つめ、言葉にしていこう。上空から下界を俯瞰（ふかん）する視点を〝鳥の眼〟、地べたを這いつくばりながら世の中の実相を体感していく姿勢を〝虫の眼〟というが、この後者の立場を貫くということだ。

そうやって、危険な落とし穴が広がっている場所や、美味しい食べ物の在り処を、これからも人々に伝えていきたい。もちろん五分の、いや満タンの魂を湛（たた）えた人間として、時にはとんでもない高みからの記述を試ることもあるかもしれない。ただし、あくまでも〝必要に応じて〟の話だ。

斎藤　貴男（さいとう　たかお）

1958年東京生まれ。早稲田大学商学部卒。英国バーミンガム大学大学院修了。主な著書に『機会不平等』『国民のしつけ方』『戦争経済大国』『驕る権力、煽るメディア』『決定版　消費税のカラクリ』『いちばんたいせつなもの』など。